

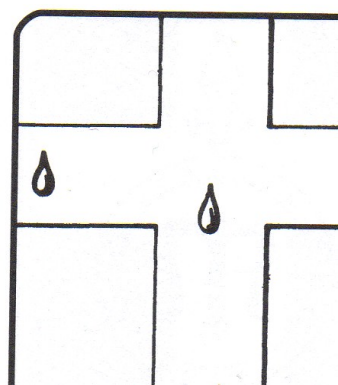
今週の特祷には、『全能の神よ、あなたをまことに知ることは、永遠の命に至る道です。』と呼びかけの言葉があり、それに続いて『どうかわたしたちが、み子イエス・キリストは道であり、真理であり、命であることを深く知ってみ跡に従い、永遠の命に至る道を絶えず進むことができますように』と、祈ります。道という言葉が3回出てきて、イエス様のみ跡に従うことの大切さを教えている祈りでした。

日曜学校などでよく歌った、聖歌の457番。みなさんもお存知でしょう。

「主に従い行くは いかに喜ばしき 心の空晴れて 光は照るよ
み跡を踏みつつ 共に進まん み跡を踏みつつ 歌いて進まん」

イエス様に従ってゆく、ということは、イエス様の歩まれた道、その足跡をたどって進んでゆく、ということです。そのことは、『いかによろこばしき』（どんなに喜ばしいことか）と歌っています。ついでに2節目3節目をみてゆくと、『いかに幸いなる』とか『いかに心強き』というふうに、イエス様の歩まれた道、その跡をたどってゆくことの素晴らしさを歌っている歌です。

私の洗礼名がフランシスだから、というわけではありませんが、イエス様の足跡をそのまま歩んで行ったイタリアの聖人、アッシジのフランシス。実際にイタリアでは、フランチェスコと呼ばれていて、聖公会はどうしても英語読みになるのでフランシスですが、この人のことは「喜びの聖人」と呼ばれているので、今回改めて、フランシチェスコの生涯を振り返りながら、イエス様の足跡を歩く喜びを考えたいと思います。次のマークがフランチェスコの紋章です。その意味がこの紋章からわかってきます。



アッシジのフランチェスコは、1182年と言いますから、今から843年前に、イタリアの裕福な織物商の家に生まれました。お父さんは彼が生まれる時、外国へ商売にでかけていました。そして、おかあさんは、外出中に産気づき、近くの馬小屋で生まれた、という伝説があります。

おそらくイエス様によく似た生涯をすごしたので、そんな逸話ができたのでしょう。お母さんはフランス人だったと言われています。お父さんが大変なフランスびいきで、フランス人を妻に迎えたのです。

馬小屋で生まれた、と言われるフランチェスコは、洗礼名にジョバンニ、つまり洗礼者ヨハネの名前を付けられました。ところが、荒野で貧しい生活をした洗礼者ヨハネに倣うことを嫌がったお父さんは、旅から帰ってくると、「私はフランス人が好きなんだ」と言って「フランチェスコ」という名前を付けたんですね。親とは勝手なものです。

裕福な織物商の家に育ったフランチェスコは、遊び好きで、陽気な性格。しかし、貧しい人に出会うと自分の小遣いの金を全部与える、というやさしい性格が最初からあったようです。

彼は二度、戦争にでかけて、病気になったり、神様から、アッシジに帰るように夢でお告げがあったりで、やがて神様に忠実に仕える道を選ぶようになりました。

しかし、彼には苦手なものがありました。町の外れに住むハンセン病の患者に出会うと、彼らを避けるようにして逃げてしまうのです。しかし、逃げた後で考え直し、彼らも自分の兄弟と分かり、服と食べ物を与えるようになります。そして、彼らに触れた時、大きな変化が起きました。彼らを兄弟と呼び、その出会いがこの上ない喜びになった、というのです。

このあたりが、『喜びの聖人』の最初の出来事かもしれません。そして、貧しきイエスの道に従う者になっていった、と言われます。

そして崩れた教会の再建のために、神父と一緒に働くようになりました。そうするうちに、彼は裕福な家の商売に使う服や馬を売って、それで教会を建てるようなことをして、それが父親にわかってしまいました。

結局、この問題で、父がフランチェスコのことをアッシジの町の司教に訴えますと、広場で裁判になりました。

「父に金を返さない」と言われて、「私は、お金だけでなく、父からのすべてを捨てて裸になります。もう私の父は創造主なる神だけ。」と宣言します。そして服を脱いでしまうので、司教は自分の服を着せて、司教館に連れて入り、古い洋服をフランチェスコに与えます。

この時、フランチェスコは、また喜びに満たされて、司教館から出て、山に向かい、歌ったり、踊ったりしました。すべてものが自分のものになったような自由を体験し、すべてが自分の兄弟姉妹。つまりすべてのものがフランシスコの兄弟姉妹と感じた。兄弟なる太陽、姉妹なる月、という言葉も出てきます。

この後、ローマ教皇に彼の修道院を認めてもらい、彼の修道院はとて大きくになります。しかし、やがてそれは彼の願ったような、自由な修道生活ではなくなってしまいます。

修道院の変化についてゆけない彼は、修道会の運営を他の人に託して、彼はラベルナ山に入ってカルチエリの洞窟で黙想生活を始めます。一番悩みの多い時期だったのではないかと思います。

1224年。ラベルナ山で、8月15日、40日の断食に入り、祈りに夢中になり、そんな中で、彼の前に、天使が現れて、イエス様が受けたのと同じような傷が、彼の両手両足、そしてわき腹にできました。これを聖痕と言います。悩みを抱えて、貧しいキリストに倣って生きてきた彼にとって、この聖痕は、大きな喜びであり、祝福があったということでしょう。神様が、キリストに似たものとして認めてくださったからです。彼の紋章には、十字架から5か所血が流れています。彼は十字架にかかって殉教したわけではありません。しかしイエス様に似た生活をした彼の生涯を表わす紋章に描かれました。

私はつくづく思うのですが、わたしたちも、聖書の教えのひとつを、そのまま自分の生き方にする時、道であるキリストを歩く喜びの生活になるのではないかなと思うようになりました。と言うのは、イエス様の言葉が、そのまま私たちの見習う道のように思えたからです。

以前、中国語の聖書を読み、ヨハネによる福音書の最初、『初めに言があった』という所を、「宇宙が造られる以前に、すでに道が存在していた。」と書かれていた事に驚いたことがあります。

ヨハネ 1 : 1 宇宙被造以前、道已經存在。道與上帝同在、道是上帝。
(初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。)

＊中国では、神のことを「上帝」と書くようです。そして、言は道なんですね。

イエス様は、神様の言葉であって、神様へ私たちを導く道なんだということを、中国語の聖書で気づかされました。

イエス様の言葉を、そのまま素直に受け入れて、それに従って歩んだフランチェスコの生き方に学びたい。そして彼と同じような喜びを、毎日、その道を歩きながら感じられる生活をしたいと思います。